

患難を求められる胃の手術後

玉木 功

胃の摘出の手術とその後よりも現在の方が厳しい。私にとって深刻な事態である。「ダンピング症候群」が起きている。胃が無いので食べた物は小腸に直接送られる。小腸は違和感を起こす。月曜日の昼にお餅をお雑煮として食べた。五十回近く咀嚼した。十分後、「ダンピング症候群」に襲われた。どのようなことが起きるかという時、嘔吐、腹痛、腹部暴慢、めまい、胸の痛み等。奇妙な症状である。脱力感、発汗もある。月曜日は五、六時間も続いた。いつそのこと死んでしまいたい、叫ぶほどである。私の場合は、嘔吐の症状になり、苦悶するが嘔吐には至らない。至らないだけ苦しむ。奇妙な苦しみである。人に訴えてもどうしようもない。トイレで部屋で孤独の苦悶を体験するだけ。痛みで涙が出る。こんな状態なので食事が怖い。落語に饅頭好きな男がいて、饅頭が怖いと言って長屋の人たちに話す。みんなは面白がつて饅頭を彼の家の中に投げ込む。彼はしめたばかりに饅頭を食べあさるといふ話である。

ダンピング症候群が起きると周囲のものに当たる人が多い。そんな情報が伝わってくる。

特に奥さんに当たる人が一番多い。

妻は信仰があるか無いかでこうも違うのかと言う。そう言われてみると、み言葉が与えられていることは感謝だ。み言葉の前で自己を抑制することができるからだ。私に与えられたみ言葉は「私は知っている。私を贖う方は生きておられ、ついに塵の上に立たれるであらう。この皮膚が損なわれようとも、この身をもつて、私は神を仰ぎ見るであらう。」

(ヨブ記一九・25・26)

私がどのようなマイナスの状況に置かれようとも、神さまの御前に立つことが許されるみ恵みを心より感謝する。真正面から患難に立ち向かう力が、神によって与えられている日々に、改めて「ありがとうございます」と。